

論文訂正

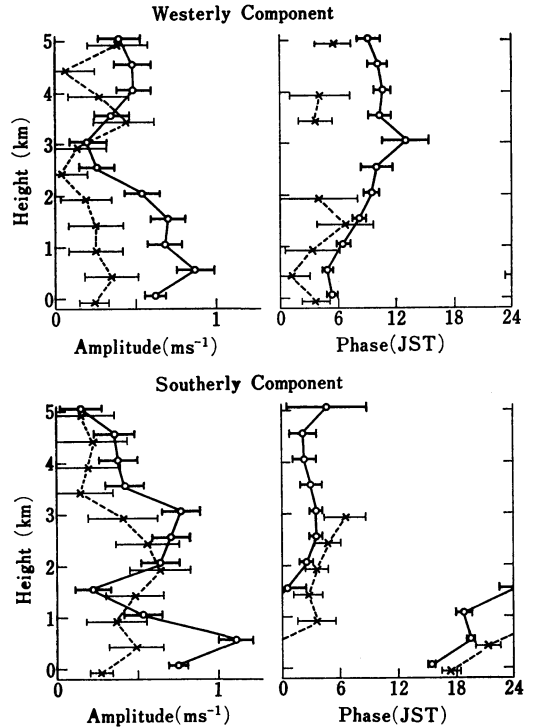
本誌26巻10号掲載の論文「関東地方における局地風に関する研究 第1部：日変化を伴う風系の構造」の中で、第5図に誤りがあったので、お詫びして訂正する。

第5図は、ルーチン高層風観測資料の解析結果を示したもので、高さ2kmにおける24時間平均風が15m/sec未満である場合について、東京における気温日較差の段階別に上層風の日変化を示したものであるが、計算ミスのため、日変化の振幅が過大に示されていた。正しい値は、気温日較差が8°C以上の日については図示された値の約40%、6°C未満の日については70~80%である。第1図に、館野についての正しい図を示す。

上記の訂正の結果、気温日較差が8°C以上の日の館野における下層の風の南北成分の日変化の振幅は1.1m/secとなり、南関東大気環境調査特別観測資料から得られた3m/sec(本文第4図)に比べてかなり小さくなる。このことに関しては、館野の高層風(1971年~1978年)および関東各地域の地上風(1973年~1978年3月)を調べた結果を参照して、次の2点をコメントしておく。

1. 「高さ2kmにおける24時間平均風が15m/sec未満で、気温日較差が8°C以上」という条件だけでは、風の日変化の発生に必ずしも好適でない場合が含まれることが考えられる。もっと強い条件(関東平野内の24時間平均気圧傾度が地衡風速にして3m/sec未満で、東京における24時間平均雲量が5未満)を用いた解析結果によれば、館野における下層の風の南北成分の日変化の振幅は1.7m/secであり、前記の1.1m/secよりも大きい。

2. しかし、それでも、関東各地域の塔における日変化の振幅(東京タワーで3.8m/sec, TVK平塚塔で4.8m/sec, 東京電力鹿島塔で2.8m/sec)に比べると



小さい。したがって、館野付近は関東平野の他の地域に比べて日変化の振幅が小さいという地域的特性があるのかもしれない。本文中に述べたように、南関東特別観測資料の解析結果からはこのような地域的特性は見出されなかったが、地上風を調べた結果によると、館野のある茨城県南西部における風の南北成分の日変化の振幅は0.8~1m/secであり、東京、神奈川および内房地域の1.5~2m/secに比べて小さい。